

大塚医院は昭和五十五年十月十五日に父が没して以来ずっと休診しておりましたが、私が北里研究所を停年退職後の平成八年七月十五日以降再開して今日に及んでおります。今年もどうぞよろしくお願い申しあげます。

秩父市・大友内科医院院長 **大友** 一夫

満つれば欠くる

バブルははじけるようになっていく。十七年前、滋賀医科大学東洋医学研究会に依頼されて、「リズム」と題する随想を発表したことがある。「興亡も又リズムである。永遠の経済成長などありえない。」と語った。陰極まれば陽、陽極まれば陰の動態を当時はリズムと表現したが、「禍福は糾える縄の如し」という洒落た言い回しがあつた。しかも日本語にはもっと適切な言葉「満つれば欠くる」がある。

その出典を尋ねると、はるか古代に遡る。古伝『秀真伝』に「出雲八重垣 大己貴命(おおなむち) 満つれば欠くることはりが」とある。出雲の大己貴命が、朝廷に比肩するほどの大宮を建てた。その奢りを糺すため、朝廷は出雲討伐に向かうのである。大己貴命は医薬の神様でもあり、民衆の信望は厚かつた。琴の音を楽しみ、百八十一人の子供を持つ艶福家でもある。しかし長じてからは奢侈に傾いた

のであろう。結局、津軽に左遷される羽目になった。

奢りをたしなめる故事であるが、大己貴命はその後も、朝廷に重用されているのであるから、その人柄が偲ばれる。彼の父、素戔鳴尊も一度流浪の民に身を落とし、再び身分を回復している。この父子は「満つれば欠くる」「欠ければ満つる」の格好の見本として登場しているのである。

今年の運勢を占う本にも、月の満ち欠けを模した図が載っている。月が欠けても、消極的になることはない。この神々のように、したたかに生きることが出来る。「晴れてよし、曇りてもよし、富士の山」ともいう。

名古屋市・大西薬局 **大西** 和子

謹賀新年

二十数年前の正月に万里の長城に登り、はるかより眺めた中国の山並に何千年もはぐくまれて来た漢方の歴史に激しく思いを揺さぶられたものである。あれからよき師にめぐり会い、一念発起して傷寒論の基礎から学ぶべく取り組んで来たものの、二十数年の間に理解できたと確信を持っているのはほんの数条のみである。果して故人は一生のうちで何条を自分のものにする事が出来たのであろうか。傷寒論は何世代かかって大成されたのであろうか。